
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 52

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1021. 創造への目覚めと内側の鬼神
- 1022. オットー・ラスキー博士からの紹介:91歳の作曲家ゴットフリード・ミハエル・ケーニツヒ氏
- 1023. 二日間のワークショップを終えて:夢の中の凶暴性
- 1024. 二年目の「実証的教育学」のプログラムでの研究内容について
- 1025. 複雑性科学と教育科学の架橋へ向けて
- 1026. SSGに関するワークショップを振り返って
- 1027. オットー・ラスキー博士との共同オンライン講座
- 1028. 辻邦生著『パリの手記』を読み終えて
- 1029. 認識の深まりと「真理」が持つ意味について
- 1030. 論文創出に関する思想体系と方法体系の構築へ向けて
- 1031. 第二弾の書籍の副題について:「実践的」という名の実践的でないものに関して
- 1032. 深い森よりも深く
- 1033. 小さいことから総体へ
- 1034. 人間であろうとする生き方:「多から一へ、一から多へ」
- 1035. 五年前の夢から:宇宙の誕生と自己の誕生
- 1036. 新緑の季節
- 1037. 作曲活動の進展
- 1038. 五線譜上の絵画
- 1039. 無気味な夢
- 1040. 早春の日曜日より

1021. 創造への目覚めと内側の鬼神

昨年11月頃から湯たんぽを用いながら就寝しているのだが、5月に入ってもまだそれを使う日が続いている。昨夜就寝前に、しばらく仰向けになりながら取り留めもないことを考えていた。一つには、今現在のような生活を今後も長く継続させていきたいということであった。二つ目は、自己批判に関するものである。

仰向けになっている最中も、自分がまだ一切の仕事を始めていないことを自分自身で批判をしていた。仕事を始めるための準備に関して、量と質が圧倒的に欠落しているという自己批判の目を自分自身に向けていたのだ。精神分析学の言葉を用いれば、こうした自己批判を加える存在は超自我と言っていいのかもしれない。最初はそうのように考えていた。

しかし、どうも超自我の存在と一言で済ますことができないような気が最近始めているのだ。人間の発達には「健全な自己批判」が必要であると言われる。確かに、現代社会を見渡すと、健全な自己批判の精神を忘れてしまっているような状態が見受けられる。これは危惧すべき現象だろう。

健全な自己批判のないところに真の成長や発達はない。現代社会において、超自我が機能不全に陥ってしまっている個人や組織を多く見かけることについてしばらく考えていた。健全な自己批判の重要性を強調する自分がいる一方で、就寝前に自分に向けていた批判の矢は、「健全」という言葉では容易に括れないものであるような気がしていた。まるで鬼神のような存在に捕らえられる感覚があったのだ。

その感覚は、批判の度合いが強いという意味ではなく、批判の出所が根幹的なものであり、なおかつその批判が本質的であるというところから生まれていた。「鬼神」というのは仰々しいが、今のところ、そのような存在が自分の内側にいることを見出したことだけは確かだ。そして、これは超自我のような存在とはまた別種のものであることが感覚的にわかっている。仰向けになりながらも少し考えを巡らせていると、鬼神を自己の内側に見出したことは喜ばしいことなのかもしれないと思い始めた。

それは否定的なものではなく、排除されるべきものでもない。今の私は、もはや健全な自己批判という緩い矢が自分に刺さらなくなっている。そのため、ここから歩みを進めていくためには、鬼神の

ような存在がもたらすより根本的かつ本質的な自己批判が必要なのだ。不思議なもので、私が内側の現象を絶えず外側に形として表現していこうと誓って以降、この鬼神のような存在が顔を現し始めた。ひょっとすると、それは創造を司る何者かなのかもしれない。自分がこの世界に何かを創出していこうとする覚悟を決めた時に、それが姿を現し始めたのだ。

そのようなことを考えると、創造への目覚めと自己の内側に鬼神を見出すことは密接に関係しているのかもしれない。何かを創造するために、そして創造への準備に向けて、内側の鬼神はかけがえのない存在なのだ、ということを考えながら就寝に向かった。

昨夜は夢の中で私は、飛行機の機内の中にいた。どこの国からどこへ向かっているのかは定かではなかったが、それが日系の飛行機であったことは確かだ。私はゆったりとした座席に腰かけながら、仮眠を取ることにした。同じ姿勢のまま寝ることを防ぐためなのだろうか、一時間に一度ほど、もし同じ姿勢で寝ていたら耳元でアラームが鳴るような装置があった。

夢の中で睡眠を取る夢を見たのは、久しぶりであった。顕在意識の私が眠りに落ち、無意識の私も眠りに落ちるといった意味をまた考えたいと思う。夢の世界のその奥にさらに夢の世界がある。であれば、この表層的な現実世界は何なのだろうか。2017/5/2

【追記】

今この追記をフローニンゲン中央駅のカフェの中で書いている。これからアムステルダムに向かう。予定通り少々早めに駅に到着し、カフェでくつろぐことができている。アムステルダム行きの列車が来るまでもう少し時間がある。

上記の日記を読み返してみると、無意識のさらに奥にある意識の層に自分が落ちていく夢を見ていたことを示唆している。今のところ、そのさらに奥深い意識の階層で夢を見たことはない。夢の中で夢を見ることは可能なのだろうか。おそらく理論的に可能であろうし、それは意識の鍛錬によって成し遂げられることがわかっている。夢の中で夢を見る日がいつかやってくるかもしれない。フローニンゲン中央駅:2018/5/30(水)09:57

1022. オットー・ラスキー博士からの紹介:91歳の作曲家ゴットフリート・ミハエル・ケーニツヒ氏

今この瞬間に書き残せることを書き残しておく。先ほど、小雨の降りしきる中、とあるレストランから自宅に向かって歩いていた。レストランを出発する前に偶然確認したメールの中に、昨日返信したメールに対して再度オットー・ラスキー博士から返信があった。

昨日の日記では、ラスキー博士と呼んでいたように思うが、いつものようにここではオットーと呼ぶ。昨日のメールの中で私が作曲活動を始めたことについてオットーに報告すると、彼は即座に様々な助言と情報を私に提供してくれた。中でも、オットーと親交の厚い作曲家を一人紹介してくれたことは、とても有り難いことであった。その方の名前はゴットフリート・ミハエル・ケーニツヒ(Gottfried Michael Koenig)と言う。

オットー曰く、ケーニツヒ氏はユトレヒト在住のドイツ人の作曲家であり、現在91歳とのことであるが、今でも作曲活動を行っているそうだ。親切にもオットーが、私がコンピューターテクノロジーを用いて作曲をするのであれば、ぜひ彼に連絡を取り、一度会いに行くといいと勧めてくれた。オットーが推薦人として私をケーニツヒ氏に紹介してくれることになったのである。ケーニツヒ氏がどのような音楽を作曲しているのかを確認し、一度ケーニツヒ氏に連絡を取ってみたいと思う。

オットーの親切心に大きな感謝の気持ちを持った。オットーと出会った時から今も変わらずに、彼はいつも私に多大な支援を与えてくれる。私は一体これまで何をオットーに返報してきたのかと自分に問いかけ続けていた。2017/5/3

1023. 二日間のワークショップを終えて:夢の中の凶暴性

一昨日と昨日にかけて、現在の私の研究で用いている研究手法「状態空間グリッド(SSG)」に関するワークショップに参加していた。そこでの体験が非常に実りの多いものであったためか、それらの体験を日記としてまとめることがとても難しかった。

これから折を見て、二日間の学びを書き留めておきたい。二日間のワークショップが終了した後、直近でこなさなければならないことが少し溜まっていることに気づいた。最も優先順位が高いものは、第二弾の書籍に関する再校の手直しである。その他にも、修士論文の“Discussion”セクションの手直しや履修している二つのコースで要求されている論文の執筆への準備がある。これら以外にも細々

としたものを挙げれば切りがないが、第二弾の書籍が出版される六月中旬、そしてフローニンゲン大学での一年目のプログラムが終了する六月末まではとても慌ただしくなりそうだ。

ワークショップに参加したわずか二日間の中に仕事が溜まっているような気がしていたのは、そうした慌ただしさを象徴しているのかもしれない。また、この二日間において自分と向き合う時間を確保することが難しく、それほど日記を書き留めることができなかつたことも、私の感情が慌ただしさに飲み込まれそうになったことと関係しているだろう。

やはり私にとって日記は、精神的な均衡を確保するために不可欠なものであり、その日に何を考え何をしたのかを記録するだけでなく、その次に何を考え何をする必要があるのかを整理することに関しても非常に有益である。今日から再び日記を綴っていきたいと思う。

二日間のワークショップで様々な研究者と知り合い、活発な意見交換をしたためか、あるいは、この二日間に日記を書き留めておくことができなかつたためなのか、昨夜の夢の主題は体験をゆっくりと消化する必要があることを示唆するようなものであった。主題に付随して、自分の中にある巨大なシャドーが顔を覗かせるような内容を持つ夢でもあった。夢の中で私は、関心を寄せるテーマに関係したクラスに参加しようとしていた。

そのクラスは二種類のもものが提供されており、どちらも同じ内容を扱うのだが、クラスで用いられる言語を英語かオランダ語のどちらかを選択できるようになっていた。私は英語で行われるクラスの方に参加したのだが、教室に入ってきた担当講師が開口一番に、「このクラスは全て英語で行われるわけではなく、ところどころオランダ語で行う」ということを述べた。

実際にクラスが始まってみると、最初のうちは英語で講義が行われていたのだが、その講師は講義の重要な箇所になると大抵オランダ語で話すようになった。文脈から、講師の話すオランダ語の意味はわかるのだが、講義における重要な箇所がやってくると、私は英語で説明して欲しいと強く思うようになり、徐々に苛立ちの感情が生まれ始めた。

細部については覚えていないのだが、おそらく夢の中で私は、講義の途中で教室を離れ、去り際に講師に対して攻撃的な捨て台詞を吐いていたように思う。夢から覚めると、夢の中で確かに自分の攻撃性を発揮していたことがわかるような感覚が全身に残っていた。

自分が夢の中で極めて強い凶暴性を発揮する時は、その日がとても慌ただしく、本来その日のうちにやるべきことが未完のままの状態ですぐに就寝に向かう場合であることが多いことに気づいた。私にとって、これはほぼ明確なパターンであると言ってもいいだろう。

夢の中で凶暴性を発揮することは決して否定的なものではなく、覚醒時においてそのような攻撃性を発揮することが社会的に許容されていないがゆえに、私にとっては大きな浄化作用を持つ。ただし、そうした浄化作用をもたらす夢を見るためには、その日が慌ただしく過ぎ去っていく必要があるかもしれないというのは残念である。両者の間には、そうした表面的な関係性を超えて、より本質的な関係性がありそうだという考えが芽生え始めているため、それを探ることに今後は焦点を当てていきたい。2017/5/4

1024. 二年目の「実証的教育学」のプログラムでの研究内容について

昨夜の夢を思い出しながら、日々の生活の中で振り返りの時間を設けることは極めて重要だと痛感している。それも頭の中で振り返りを行うのではなく、必ず文章の形で振り返ることが何よりも大切だと強く実感している。私は基本的に、少なくとも朝と夕方それぞれに一時間か一時間半ほどの時間をとって日記を書き留めるようにしている。これは私にとって習慣的な実践であり、そうした習慣的な実践がいかに私の日々を支えてくれているのかに改めて気付かせてくれたのが、この二日間であった。

一昨日と昨日はワークショップに朝から夜まで参加していたため、朝と夕方に日記を綴るような時間的余裕がなかった。そうした時間的余裕の無さが、精神的余裕を剥奪することにつながっていた。そして、時間的余裕が精神的余裕に対して一方向的に影響を与えるのではなく、精神的余裕が時間的余裕に影響を与えるという双方向的な円環関係が生まれていることにも気づいた。これは精神生活にとって負の連鎖を生み出しかねない。

この二日間、朝と夕方に多くの時間を取ることはできなかったが、それでも早朝の時間にかろうじて、昨日の出来事を振り返り、今日の展望に思いを馳せるような時間を設けたことは重要であった。この二日間を振り返ってみると、時間的な余裕がないことを言い訳にするのではなく、時間を作ろうと思えばいくらでも作れたことが後になってわかる。

その日の中で咀嚼すべき体験が多い時、そして慌ただしい時に限って、その瞬間にやる必要のないことに着手してしまうことがよくある。その瞬間にやるべきではない優先事項の低い項目を適切に判断し、振り返りの時間を優先的に確保し、文章を書き留めておくことを最優先にしたいと思わせてくれるような二日間であった。

今日からは再び通常の生活に戻るため、朝夕のリズムを取り戻し、時間的に余裕のない場合でも文章を書く時間を確保する試みを実践したいと思う。今日は午後の一つ、とても楽しみな用事がある。今年の九月から私が在籍したいと思う「実証的教育学」のプログラムのコーディネーターと面接をすることになっているのだ。

実は偶然にも、二日間のワークショップにその教授も参加しており、一昨日にはその教授がプレゼンテーションを行い、昨日は相席をすることになり、色々と話をすることができた。私にとって最も喜ばしかったのは、フローニンゲン大学の実証的教育学の学科の中に、ダイナミックシステムアプローチに関心を持っている教授がいたことであった。

その教授は、チリ出身の女性の研究者である。今日はその方と面接をすることになっている。形式的には、私のこれまでの経験と現在の関心が実証的教育学のプログラムに合致するのかを確かめるアドミッション面接なのだが、昨日の話に引き続き、さらに詳しく自分の研究テーマを紹介し、プログラムについてあれこれと質問をしてみたいと思う。

昨夜も二年目のプログラムの中で行う研究テーマについてあれこれと考えていた。今回の研究は、フローニンゲン大学が提供するMOOCを取り上げ、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスを活用する内容を考えている。昨日あれこれと考えていたのは、具体的なテーマを設定することであった。その研究を通じて何を明らかにしたいのかを明確にする必要があった。

MOOCでの学習環境は、やはり実際の教室と性質を異にしており、教師と学習者がリアルタイムでやり取りをするのは今のところ難しい。私が研究対象にしようと思っているコースの規模が大きいものであるため、なおさら教師と学習者のリアルタイムなインタラクションは難しい。コースの規模が小さいものであれば、もしかしたらリアルタイムなインタラクションを行うことが可能なかもしれないが、そのようなMOOCのコースはそれほど多くないだろう。そうしたことから、一年目の研究で行ってい

たような、教師と学習者のリアルタイムなインタラクションを調査することは難しいだろうと思っていた。

また、フローニンゲン大学のMOOCを統括するディレクターから、研究内容をコースの改善や有益な実践につながるようなものにしてほしいという要望を受けていたことも、テーマ設定を難しくさせる要因の一つであった。昨夜の段階では、これまでの研究と大きなテーマは同じにし、講義内容の複雑性と学習者の講義内容に対する理解度を調査するようなものにしたかった。しかし、得られるデータの性質上、これまでのように二つのプロセスを比較することが難しいため、工夫が必要だと思った。

例えば、講義動画のトランスクリプトの意味段落ごとに複雑性を分析し、その週に行われる講義の複雑性に関する時系列データを作成する。そして、その時系列データの構造を「トレンド除去変動解析(DFA)」で分析し、その結果を毎週の確認テストの結果と比較するというのは面白そうだった。より具体的には、講義の複雑性に潜む構造特性が、受講生の確認テストの結果に重大な影響を与えているのかを調査するということである。この調査をするためには、DFAのような非線形ダイナミクスの手法と古典的な統計手法、もしくはモンテカルロ法などを活用する必要があるだろう。

いずれにせよ、講義内容に関する複雑性の時系列データを表面的に眺めるのではなく、データの示す波形がどのような潜在的構造特性を持っているのかを特定し、その構造特性と学習者の理解度との対応関係を調査していくというアイデアを、今日の面接の中で紹介したいと思う。2017/5/4

【追記】

昨日は、この日記を象徴するような一日だった。私は、文章を刻みながら時を刻んでいかなければ、日々を充実した形で過ごすことができなくなっている。

二年目の研究の一つは、この日記で書かれているように、フローニンゲン大学が提供するあるオンラインコースの情報の複雑性が持つ「フラクタル構造」を特定し、フラクタル次元と学習者の学習結果を比較するような内容を考えている。2017/5/15

明後日からの国際ジャン・ピアジェ学会に参加するためにアムステルダムに向かう。今ちょうど列車に乗り込み、二階の席を確保した。まだ列車は動き出しておらず、あと五分したら出発する。今回の学会には、ちょうど上記の日記で言及していたチリ人の研究者マイラ・マスカレノ教授も参加する。この一年間の実証的教育学プログラムではマスカレノ教授に随分とお世話になった。テーマと曜日は異なるが今回二人揃って学会で発表できることを嬉しく思う。フローニンゲン中央駅:2018/5/30 (水)10:15

1025. 複雑性科学と教育科学の架橋へ向けて

今日は一つ嬉しい知らせがあった。無事に「実証的教育学」のプログラムに入学が許可され、今年の九月からは教育科学学科に在籍しながら研究を続けることができる。これでオランダにさらに二年間ほど滞在できることが確定した。実際には、このプログラムは一年間のものなのだが、その後一年間ほど非公式の形でフローニンゲン大学に所属し、自分が探究したいことを自由に深めていくことを可能にする期間を設ける予定である。

過去十年間を振り返ってみて、三年間同じ都市に滞在したことはなかったのも、これは少しばかり新しい体験になる。仮に一年目のプログラムが終了した後に所属先の大学を変えることになっていけば、また引越しをしなければならなかったが、それを避けることができた。

引越しをしなくて済んだということだけではなく、フローニンゲン大学に残ってさらなる探究を行えることが純粋に嬉しい。これまで滞在した世界のどの都市よりも、自分の関心事項を落ち着いて探究できる場所はフローニンゲンだと思っている。

実証的教育学のプログラムに入学を許可されたのは、実は午後に行われたインタビューの数時間後であった。インタビューには、先日のワークショップで偶然に知り合ったマイラ・マスカレノ教授を含め、その他に二人の教授が同席をした。時間にして30分という短い時間であったが、複雑性科学と教育科学の架橋について、理論的かつ方法論的な話題で終始盛り上がった。一人の教授から、私が教育科学学科に対してどのような貢献ができるか、という質問が投げかけられた。

一つには、ダイナミックシステムアプローチと非線形ダイナミクスに関する概念と研究手法を教授陣と学生に教えるワークショップやレクチャーを提供することができる、と私は回答した。これは自分を

売り込む文句でも何でもなく、是非とも実現させたいことである。実際に、先日のワークショップの中で、マスカレノ教授と相席になった時、私はこのワークショップで扱った「状態空間グリッド(SSG)」という手法と専用のソフトウェアを現在の研究で活用していたため、彼女にその使い方を教える場面があった。

マスカレノ教授曰く、フローニンゲン大学の教育科学学科においても徐々にダイナミックシステム理論の考え方が浸透し始めているようだが、それはまだ概念的な次元で留まっており、実際に研究手法を活用するところまでには至っていないようだ。

そうしたこともあり、私がこれまでに学んだ理論と研究手法の使い方を教授陣だけではなく、同じプログラムの学生にレクチャーするような機会を得られればと思う。私がフローニンゲン大学の二年目に所属することになったこのプログラムは、教育科学のプログラムのうちの一つであり、特に少人数制を採用し、研究に関するきめ細かな指導を行うそうだ。

インタビューの最後に教授陣と少しばかり雑談をしたところ、このプログラムには2~10名ほどしか入学許可を出さないとのことである。私のインタビューの前に、スカイプを通じて米国人、英国人、中国人の志願者とインタビューを行ったそうだ。同期がどのような顔ぶれになるのかを含め、九月からの新たなプログラムが今から非常に楽しみだ。2017/5/4

【追記】

このプログラムを通じて、学習理論や教育心理学の理解を深め、成人学習や成人発達に関する実践を「教育科学」や「教育哲学」の観点から探究するということが二年目の大きなテーマになる。一年目と同様に、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスに関する探究を継続させながら、それを実証的教育学と架橋させて行く試みをしたいと思う。2017/5/16

アムステルダム行きの列車が出発した。フローニンゲン中央駅のカフェで久しぶりにチョコレートドーナツを購入した。列車が動き始めてすぐにそれを食べた。濃いコーヒーに合う美味であった。

上記の日記で言及しているように、私はフローニンゲンで三年間過ごすことになった。この十年を振り返ってみて、同じ場所で三年以上生活をしたことのない私にとって、それは新たな経験となる。

とにかく今年は自分の探究テーマを納得のいくまでとことん探究していく。大学に所属しない道を選び、それが功を奏して何の制限もなく探究活動に打ち込むことができる。それを行うための諸々の準備は整っている。時間の確保にせよ、探究のために必要となる文献などにせよ、全ての準備は整ったと言える。あとは六月の中旬に論文を提出するだけとなり、無事に論文を提出したことを契機として、自分の内側にいる魔神と親しくなるようにする。

結局、フローニンゲン大学の二年目で所属したプログラムには学生は私しかいなかった。志願者は多かったようだが、実際に受け入れられたのは私だけだった。今年は何名このプログラムにやってくるのだろうか。数ヶ月前に話をしたスコットランド人の彼は入学を許可されたであろうか。

アムステルダムに向かう列車の窓からのどかな光景が見える。何頭かの牛が平和そうに牧草を食べている。アムステルダムに向かうアムステルダムに向かう列車の中:2018/5/30(水)10:29

1026. SSGに関するワークショップを振り返って

再び日々の生活が落ち着いたものになりそうだ。数日前に開催されたワークショップについて少しばかり振り返っていた。このワークショップは、私が現在の研究に適用している「状態空間グリッド(SSG)」という手法に関するものだ。この手法を開発したのは、マーク・レヴィスという発達心理学者だが、レヴィスに師事していたトム・ホルンシュタインがSSGを活用した研究を最も多く行っており、彼がこの手法の可能性をさらに押し広げたとと言える。

フローニンゲン大学のメインキャンパス付近で開催されたこのワークショップに、ホルンシュタイン教授がカナダから参加してくれたことは、私にとって幸運だった。実際に、ホルンシュタイン教授と直接会って話をする機会を得ることができ、現在行っている自分の研究を通じて直面したSSGに関する理論的・方法論的な質問をホルンシュタイン教授に投げかけることができた。

SSGという手法を活用すれば、ダイナミックシステムの挙動や特徴を様々な観点から分析することができる。この手法の特に優れている点は、「再帰定量化解析(RQA)」や「トレンド除去変動解析(DFA)」などの非線形ダイナミクス的手法に比べて、視覚的に分析結果を解釈しやすく、また分析結果が持つ定性的な意味を汲み取りやすいということである。

ちょうどそのワークショップの初日の途中で、前の学期に受講した「複雑性とタレントディベロップメント」のコースを担当していたマライン・ヴァン・ダイク教授がプレゼンテーションを行い、最後に興味深いコメントを残していた。ヴァン・ダイク教授がSSGに対して持っている考え方は私と似ているが、「複雑性とタレントディベロップメント」のコースを担当していたもう一人のラルフ・コックス教授は、SSGが非線形ダイナミクス的手法に比べて数学的に厳密ではない、という批判的な見解を持っているということであった。

ヴァン・ダイク教授とコックス教授はともに、人間の発達をダイナミックシステムとみなした研究に従事しているが、活用している手法が異なり、その裏には研究手法に対する思想が異なるという事情があるようだ。二人は協働して一つのコースを提供しているがゆえに、決して対立をしているわけではないが、研究アプローチの相違があることは間違いない。

昨日、「実証的教育学」のプログラムに入学するためのインタビューを受けたが、そこでもインタビューを担当した三人の教授が実証的教育学に対して持っている思想が異なっていることを見て取れた。そこで思ったのは、こうした思想上の差異が抑圧されることなく表に出せることは非常に健全だということだった。同じ学科の中で、発達や教育に対する思想が異なり、発達研究や教育研究に対するアプローチが異なるのは当然のことであり、それが許容されていない方が不健全だと思うのだ。

フローニンゲン大学がダイナミックシステムアプローチを活用した発達研究において最先端であるゆえんは、思想的かつ方法論的な差異が確保されていることにあるのかもしれない。2017/5/5

1027. オッター・ラスキー博士との共同オンライン講座

昨日、無事にフローニンゲン大学での二年目の所属先が決まり、少なくともこれからさらに二年間はオランダで生活することになった。その後については確定的ではないが、米国に再び戻って探究を続けるか、ハンガリーでネットワーク理論に関する探究を行うか、そのままオランダに残って研究を続けることなどが選択肢に上がっている。いずれにせよ、私にとってこれ以上ないほどに素晴らしい環境を提供してくれるフローニンゲン大学とフローニンゲンの街に残れることは大きな喜びである。二年目の所属先が決まり、また心機一転、自分の探究活動に打ち込みたいと思う。六月半ばに一年目のプログラムが終了するまでは、やるべきことが詰まった期間になるだろう。

数日前にオットー・ラスキー博士からメールが届き、今もまだそのやり取りが続いている。これはオットーと以前から話していたことなのだが、一緒に発達理論を教えるようなオンライン講座を近い将来開きたいと思う。とりわけ、私がオットーの功績の中でも最も感銘を受けた、28個の思考様式の発達に関する理論を紹介することができればと思う。この講座を日本人の方に向けて提供するに際して、オットーと話し合っていたのは、一つ言語の問題がある。

当初は、私が通訳のような役割を果たし、オットーと受講者のやり取りを英語から日本語に変換し、日本語から英語に変換するというを考えていた。しかし、それでは学習効率を著しく下げってしまうことになりかねないと懸念しており、日本語ではなく英語で日本人向けの講座を開こうという提案を私の方から投げかけた。

オットー自身も英語圏の出身ではなく、ドイツ人であり、彼の英語は明瞭かつゆったりとした速度であるため、日本人でも十分に聴き取れると思う。ロバート・キーガン、ビル・トーバート、スザンヌ・クックグロイター等の発達理論とはまた異なり、純粋に認知的発達に焦点を当てるオットーの発達理論は、私にとっても今でも得ることが多くある。対象者や講座内容についてはオットーとこれからさらに話し合う必要があるが、近い将来オットーと協働して何かしらのオンライン講座を開きたいと思う。

オットーとのやり取りを振り返りながら、自宅の郵便受けに向かうと、イギリスから作曲に関するテキストが二冊ほど届いていた。その中身を確認すると、私が期待していたように、作曲の基礎がわかりやすく解説されている。小学校の低学年の子供でも作曲を楽しめることをテーマにしたこの二冊のテキストは、今の私の作曲に関する発達段階に合致している。今週末に時間を設け、このテキストを一章一章進めていく過程の中で、実際に手を動かしながら曲を作っていきたいと思う。

六月末に一年目のプログラムが全て終了し、落ち着ける時期に来たら、オットーが紹介してくれたユトレヒトに在住する91歳の作曲家ゴットフリード・ミハエル・ケーニツヒ氏に面会希望の連絡をしようと思う。2017/5/5

1028. 辻邦生著『パリの手記』を読み終えて

書齋に鳴り響くベートーヴェンの力強い交響曲とは打って変わって、今の私はとても神妙な気持ちに包まれている。たった今、今年の夏に日本を離れる直前から読み始めていた、辻邦生先生の『パリの手記』全五巻を読み終えた。

私が米国での最初の二年間に陥った精神的な危機に再び陥ることを避けるために、欧州での生活を始めるにあたり、私は生きた本当の日本語を求めていた。決して死物と化した日本語ではなく、生命が宿っていると言わんばかりの日本語が私には必要だった。

欧州の旅立ちの前に、私は辻邦生先生が執筆した小説作品以外の全ての日記とエッセー集を購入していた。それらを持って私はオランダの地に降り立った。

今年の八月にオランダに到着して以降、私は折を見て、意識的に日本語の文章に触れるようにした。上述したように、それは米国で経験した精神的危機を欧州での生活において経験しないためであった。欧州での生活を始めるに際して、一貫して私は、自分が日本語だと認める日本語しか目を通さないと頑なに決めていた。日本語という言葉にもアイデアのようなものが存在するのであれば、そのアイデアが滲み出るような日本語しか触れないという態度を持って欧州での生活を始めた。

自身の実存性とある種の魂のようなものが沸き立つ日本語の文章を執筆している一人に辻先生がいた。オランダでの生活の始まりとともに、私は毎週末ではないものの、定期的に辻先生の日記をゆっくりと読み進めていた。

辻先生は、1957年の秋から1961年に春にかけて、およそ三年半にわたってパリに留学をしていた。留学と言ってもどこかの大学に所属していたわけではなく、小説を執筆することの意味を見出すため、そして小説を創出するための方法論を確立するために、パリで三年半ほど探究活動を行っていたのである。このパリでの探究期間が、小説家としての辻邦生を形作ったと言っても過言ではないだろう。実際に、パリでの探究活動を終えてから、辻先生は本格的な創作活動に入る。

辻先生がこの手記を執筆していた年齢は、私が欧州へ渡った年齢とほとんど同じである。また、当時の私は辻先生が抱えていたと同様の課題を抱えていたということも、この手記に私が惹きつけられた理由だろう。

私は辻先生の手記を読みながら、いつも大きな励ましを得ていたと言える。時に痛々しい記述や深い苦悩が記された先生の手記を読みながら、何かを創造することの意味と創造するための条件のようなものの一端を私は必死に掴もうとしていた。

先ほど全五巻の最終巻を読み終えた時、私はここから再び、自分の仕事をなすための試みを始めなければならない、と覚悟を新たにした。私の内側では一切の仕事が始まっていないため、そこに向けて絶えず研鑽を積みながら日々の取り組みに向き合っていくことが何よりも大切だ。最終巻を読み終えた後に感じていた神妙な気持ちは、新たな始まりの呼び鈴であるとともに、自分が確かな歩みを着実に進めていることを示す通達のようなものであった。2017/5/5

1029. 認識の深まりと「真理」が持つ意味について

今日は朝一番に、ドビュッシーのピアノ曲をかけ始めたのだが、一曲目の途中で、これでは仕事を始められないと思い、別の作曲家のピアノ曲をかけることにした。もちろんドビュッシーの曲は否定されるべきものではなく、その時間帯の私の感情と感覚に全く合致していなかったというだけの話である。結婚式の最中に鎮魂歌を流さないのと同じように、その時々にはふさわしい音楽というものが存在しているのだ。

その後、グレン・グールドの“Glenn Gould plays Renaissance & Baroque Music: Byrd; Gibbons; Sweelinck; Handel: Suites for Harpsichord (1970)”というCDを聴き始めた。このCDを何気なく聴き始めたところ、おそらくヘンデルの曲に至った時、「ああ、これがハープシコードと呼ばれる楽器が奏でる音なのだ」という思考が飛び跳ねた。

思考が飛び上がるのを感じて以降、普段通りの仕事の波に乗り始めた。ようやく、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの“Difference and Repetition (1968)”の再読を終えた。本日、最終章を読み進めていた時に、この数日間を過ごす間において、ドゥルーズの思想から感化される度合いが緩まって

いることに気づいた。ちょうど本書からいったん時間と精神的な距離を置く時期に差し掛かったのだと知る。

午前中の仕事を終え、昼食を摂っている最中に、「真理」と呼ばれるものに対して関心の矢が突き刺さっていた。これまでの私は、相当に認識の眼が曇らされていたことに気づかされる。というのも、主観的な真理を認めつつ、客観的な真理など存在しないという認識を持っていたからだ。この認識は、ある種の矛盾を含んでいることに気づいた。

欧州での生活を始める前後から、個人の内側の感覚を思想にまで高め、それをさらに磨いていくことによって主観的な真理に到達することができるという確信を得ていた。しかし、そうした主観的な真理が存在することを認める一方で、客観的な真理の存在を否定している自分がいたのである。科学的な研究に従事する仕事をしているにもかかわらず、そのような有り様であった。ただし、主観的な真理に到達することが、普遍性に至ることと同じ意味を持つことに気づいた自分がいたことは確かである。

昼食時に疑問に思っていたのは、ここで述べる普遍性と呼ばれる言葉の意味であり、それと客観的な真理との違いについてである。ハッとさせられたのは、普遍性と客観的な真理とは同じ事柄を指しており、そうだとするならば、主観的な真理と客観的な真理も同じ事柄を指しているのではないか、という気づきが得られたことだった。

個人の感覚を思想に昇華させ、その思想そのものをさらに発展させて行った先に主観的な真理が待っており、それが普遍性に至ることと同じ意味であるならば、究極的な主観的な真理と客観的な真理は表裏一体の関係にあると思ったのだ。私は何を求め、何に向かって主観的・客観的な探究を行っているのかの意味が、真夏の太陽に照らされるかのように明瞭なものになったのだ。

真理に対する認識の深まりにも発達段階があるようだ。それは順番に、主観的(客観的)な真理など存在しないという段階、主観的(客観的)な真理を認めつつも客観的(主観的)な真理を認めないという段階、主観的な真理に至ることと普遍性に至ることは同義であると認識する段階、そこから主観的な真理と客観的な真理は普遍性を連結点として表裏一体の関係になっていることを認識する段階へと進んでいくのだ、ということを経験させられた。

認識が深まることによって開示される意味が深まっていく、というありふれた言葉の裏には、実際に認識が深まることによってしかその言葉の真意を汲み取れないようなことが確かに存在している、と改めて気付かされる。

今日が曇りであり、明日が晴れであり、明後日が曇りであるように、認識を覆う雲が完全に晴れることはないことを知っている。ただし、それは雲の下で生活を続けた場合という前提条件があることを忘れてはならない。雲の上の世界があるという認識を得たことは、認識を覆う雲が完全に晴れる段階があるのだということを私に確信させるには十分であり、そこに向かおうとする私の背中を押ししているように思えた。2017/5/5

1030. 論文創出に関する思想体系と方法体系の構築へ向けて

今日は午後より、修士論文の手直しを行っていた。先日執筆した文章を再び読み返すと、執筆した本人ですら即座に意味を理解できない箇所があったり、パラグラフ全体の堅牢性が脆弱であったりする箇所が目立った。特に、“Discussion”セクションでは、私自身の考えを分析結果をもとに展開していくことが求められているがゆえに、客観的な記述を淡々と積み重ねていけば良い他のセクションよりも文書の傷が目立った。そうした傷を修復し、以前よりも強固な内容を持つ文章を少しずつ築き上げていった。

建築にも似た作業を少しずつ積み重ねていった結果、本日の夕方に全ての修正がひと段落ついた。今週末の土日にもう一度文章を読み返し、論文アドバイザーのサスキア・クネン教授に日曜日にドラフトを送りたい。いよいよ先生とのミーティングも残すところ二回となった。

今回の論文の執筆を通じて、学術論文を創造することについてより考えを深めていく必要があることを痛感した。特に、それは学術論文を執筆する意義に関するものであり、また、方法論的なことでもある。やはりまだ私には、論文を執筆することに関する思想が欠如しており、論文作成の方法論を構築するには至っていない。前者の思想に関する問題は幾分厄介であり、「そもそも科学の目的とは何なのか？」「科学的な知の意義とは何なのか？」という問題にまで掘り下げて考えなければならない。

そして、科学的な知をより客観的な知へ発展させていく際の方法についても哲学的な問題とぶつかる。つくづく科学的な営みと哲学的な営みは、切っても切れない関係にあると思わされる。

今後の私がやるべきことは二つある。一つには、学術論文の創出に関して、思想的かつ方法論的な問題をより明確ないくつかの問題に分けて考えていくことだろう。今の私はあまりにも漠然とした問題に取り掛かりすぎている。それゆえに、論文の創出に関する自分なりの思想体系と方法体系の構築が遅れているように思うのだ。

小説家の辻邦生先生が、小説に関する思想的・方法論的な無数の問題と一つ一つ向き合い、『小説への序章』を執筆したように、私も同様のプロセスを辿って、学術論文に関する思想的・方法論的な問題と一つ一つ向き合っていきたいと思う。そのためには、日々の研究活動を通じて得られた洞察や疑問を逃さず日記として書き留めておくことが有効だろう。日記の中で、それらの洞察から得られた新たな考えを書き留め、直面した疑問に対する現時点での回答を提示しておくことが不可欠だ。

そしてもう一つ私がやるべきことは、言うまでもなく、論文を書き続けるということだ。これが何よりも重要である。学術論文という作品を残すという営みは、研究者自身にとってみれば、それはさらなる研究を展開させていくための触媒として機能する。ここで重要なのは、作品を形として残さなければ、触媒としての発達作用が生まれないということである。言い換えると、形として論文を残さないということは、さらなる展開の足取りを止めてしまうことを意味する。それは研究者自身の発達の歩みを止めることに等しい。

とにかく私は、今後も学術論文を書き、その過程で得られた洞察と疑問に絶えず向き合い、一つの作品が次の作品へと自発的に流れていく運動の中で生きていきたいと思う。決して歩みを止めるわけにはいかないのだ。

外側の真理から内側の真理に到達するために学術論文を書き、内側の真理から外側の真理に到達するために日記を書き続ける。それらは互いに独立していながらも、相互に影響を与え合っており、普遍性に向かうための運動を推し進めるための行為であることに変わりはない。普遍性に向かう運動と一寸の隙間もなく合一を果たせるように、私は文章を書き続けたいと思う。2017/5/5

1031. 第二弾の書籍の副題について:「実践的」という名の実践的でないものに関して

夕方から第二弾の書籍の再校に修正を施す作業に取り掛かった。現在は第一章に対して修正を加え、二章から五章にかけては編集者の方から再校を送っていただくのを待っている。とりあえず今の自分にできる作業を進めていった。初校になる前の原稿と比較してみると、再校は随分と余分な肉が削ぎ落とされ、凝縮感があるように思う。

印刷用の最終原稿として、文章全体が凝縮性と共に一本の幹でつながった全体性のあるものになりたい。再校への手直しを少し行い、夕食前に入浴をした。入浴時にふと、「考える」という動詞が動詞であるゆえんについて考えていた。世間一般では、考えるという行為と行動するという行為が別物として扱われているのではないか、という問題提起があった。

そもそも、考えるという行為が「考える」という動詞として存在している本質には、考えるということは行動するのと同じぐらいに実践的だという意味が含まれているのではないだろうか、と思った。私にとって、考えることは行動することと同じぐらいに動的であり、行動すること以上に実践的なものに映る。

この問題に付随して、書物を読むというような座学に対して否定的な目が向けられ、それが実践的なものではないと見なされる傾向にあるのは、そもそも「書物を読むという実践」と並行して「考えるという実践」が行われていないからだろう。書物を読むというのは決して受動的なものではなく、極めて能動的なものであり、考えるという行為と本来不可分であるがゆえに実践的だと思うのだ。行動することだけが実践的だと捉えるならば、人間以上に動物の方が実践的な生き物だと言えるだろう。

第二弾の書籍の副題に「実践的」という言葉を用いたのは、それが実践的な内容を持つというよりも、私の中では、世間一般に思われている「実践的」という意味をもう一度見直す必要があるのではないかと、ということに訴えるためであった。

「実践」を強調する人の中に、真に実践的な人を私はほとんど見たことがない。「実践」という言葉が内包する意味にも当然ながら階層性があり、世間一般に用いられている「実践」というのは、極めて低い段階の意味に貶められてしまっている。そうした状況に光を当て、実践という言葉の本来の意味を取り戻す必要があるのではないかと、という問題提起を第二弾の書籍の中で行いたかったのだ。

先日から本日にかけてやり取りが続いているオットー・ラスキー博士の発達理論で言えば、「実践知」というのは、単なる行動的な実践を積み重ねて獲得できるようなものではない。実践知を獲得するためには、単なる行動以上に、何よりも「考える」という絶え間ない実践がなければならないのだ。

これは以前の日記で書き留めていたことと関係しているが、哲学のように新たな言語体系を私たちに提供してくれる学問は、それが新たな言葉を私たちにもたらすがゆえに、私たちの認識を変容し、行動を変容させていくのだ。

ここでも、新たな言葉を獲得していくことは、認識変容と行動変容を本質的に伴うべきものであるがゆえに、それは実践的なのだ。もしそれが実践的でもなく、認識変容も行動変容も伴わないのであれば、それは新たな言葉を獲得したことにはならないし、哲学と真に触れたことを意味しない。

「実践」という言葉を安易に用いるのではなく、その言葉が持つ本質的な意味を考えると実践を行ってからその言葉を用いるべきだろう。そのようなことを入浴中に考えていた。2017/5/5

【追記】

第二弾の書籍のタイトルが『成人発達理論による能力の成長:ダイナミックスキル理論による実践的トレーニング』から『成人発達理論による能力の成長:ダイナミックスキル理論の実践的活用法』に変更となった。2017/5/17

1032. 深い森よりも深く

森閑とした辺りに、姿の见えない鳥の鳴き声がこだまする。フローニンゲンの街は夜の九時を迎えたが、まだ闇の世界が訪れていない。

今日は一日中曇り空であったため、この時間帯の空模様がより鬱蒼としたものに見える。しかし、闇の世界に今にも入ろうとする世界の中で、姿の见えない鳥の鳴き声はより存在感を増していく。

私はまるで深い森の中で生活をしているかのようなのである。人影もなく、自然だけに囲まれた深い森の中で、生き物たちの声を聞きながらその日を終える。そのような生活風景が私の脳裏に浮かんでくる。鳥の鳴き声は、止むこともなく遠方からこちらにやってくる。

今の私の心象風景に呼応するかのように、書斎の中でベートーヴェンのピアノソナタ第14番『月光』の第1楽章が流れ始めた。演奏者はアルトゥル・シュナーベルというピアニストだ。シュナーベルの演奏を聴きながら、ピアニストも自らの演奏を自分で創造していくという確固たる意志がなければ、人工知能に取って代わられるような存在なのだと思う。これは、ピアニストに限らず、科学者でも小説家でも、創造に携わるあらゆる職種に当てはまることだろう。

あえてピアニストに限って言えば、仮に楽譜に書かれていることをそのまま演奏するだけに留まるのであれば、人間の演奏よりもコンピューターの演奏の方が圧倒的に正確であるがゆえに、人間のピアニストの演奏に価値など見いだせなくなってしまうだろう。重要なのは、演奏家という一人の人間が持つ固有の思想と経験を演奏の中で表現していくことなのだと思う。仮にこれができなければ、演奏家は遅かれ早かれ人工知能に取って代わられるだろう。

それゆえに、人工知能に生み出すことのできない固有の人間の思想と経験の総体を演奏の中に表現することが大切なのだ、ということをシュナーベルの演奏を聴きながら思った。また、ピアニストが演奏の中で自らの思想と経験を表現するためには、そもそも表現に足るだけの思想の成熟と経験の総体が構築されていなければならない。

正確無比の機械的な演奏なら人工知能で十分に行える。しかし、一人の人間という固有の存在だけが持つ思想と経験が織りなす音は、人工知能に易々と奏でることはできないだろう。シュナーベルの演奏は、思想を深めていくことと、経験の総体を構築していく研鑽を積むことの重要性を改めて感じさせてくれる演奏だった。

深い森の中で静かに生活を送っているような感覚が依然として続いている。私はこの生活を少なくとも後二年間、オランダのこの地で送ることになる。日々が黙想的であり、生きることのすべてが観想的であることを何よりも望む。そうした生活の中で、今この瞬間に私を包む、深い森のような感覚の深さよりもさらに深い思想と経験を育んでいきたい。2017/5/5

【追記】

北欧の森。とりわけ、ノルウェーに偏在する森がどれほど深いものなのかを、自らの眼で確認したいという思いが日増しに強くなる。やはり八月は、ノルウェーに足を運ばなければならない。2017/5/17

1033. 小さいことから総体へ

相変わらず寒い日が続いている。五月も第二週目に入ろうとしているが、朝夕の気温は依然として低い。昨日は日中も特に寒く感じられ、真冬の時と同じ温度設定ではないが、暖房をつけていた。就寝に関しても、湯たんぽを用いてお腹と足元を温めながら寝る日々が続く。

しかし、そうした日々の中にあっても、私を取り巻く全ての事柄が着実な足取りで成熟の方向へ向かっていることは喜ばしい。北欧と形容できるこの場所において、私は自分の内側の知識や経験を着実に熟成させることができていると確信している。

昨日、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの書籍をようやく読み終えることができた。当初の予定では、次に取り掛かる哲学書はカントの“Critique of Judgment (1790)”にしようと思っていた。特に、美的判断に関する箇所を丹念に読み進めていこうと計画していた。しかし、それよりも先に、ジャン・ピアジェの“Structuralism (1968)”を読み進めていこうと思う。本書は、フローニンゲンの街の古書店で偶然発見したものであり、この書籍が哲学書コーナーに置かれていたことからわかるように、ピアジェは発達心理学者というよりも哲学者とみなした方がいいだろう。

ピアジェの発達理論の根幹には認識論があり、さらには構造主義哲学の思想が流れている。本書を通じて、改めてピアジェの発達思想の根幹にある哲学を辿っていこうと思う。

ドゥルーズにせよ、ピアジェにせよ、一人の哲学者が生み出す概念は、その人固有の感覚と経験が凝縮されたものなのだとつくづく思う。哲学者それぞれが持つ独特の言語世界に触れることは、私自身の言語世界をさらに開拓し、それが自分の内側の感覚と経験に直接的な影響を与える。

午前中はまず、ピアジェの書籍から取り組みたい。その後は、ある組織との共同作業に関する資料を作成する。そこから再び、ダイナミックシステム理論と心理学を架橋させる探究を行うために、

“Dynamical Psychology: Complexity, Self-Organization and Mind (2009)”を読み進めていきたい。
午前中の間にそれら全てをこなすことができれば幸いだ。

今日は土曜日であるため、それらの仕事が全て終わったら、午後から夕方から作曲の学習と実践に打ち込みたい。昨日に届いた二冊のテキストをもとに、基礎的な音楽理論と作曲の手順を学び、作曲専用のソフトを用いながら小さな作品を作りたいと思う。

小説家の星新一氏が短い作品を作り続け、独自の作品世界を構築したように、当面は短い曲を作り続けていきたいと思う。作曲も学术论文の執筆も、小さな作品を絶えず生み出すことを継続させて、少しずつ一つの大きな総体へ向かっていきたいと思う。2017/5/6

1034. 人間であろうとする生き方:「多から一へ、一から多へ」

人が人らしく生きることを喪失しつつある現代社会において、一人の人間が人間性を追求しながら、最後の最後まで人間であろうとするような生き方を自分は貫きたいのかもしれない、という考えが自分の内側から湧き上がった。

残念ながらこの社会において、愚直に人間性を追求し、人間性に沿った生き方を希求することは、非常に馬鹿げたことのように思われるのかもしれない。いや、それよりもむしろ、人間性を追求しながら人間として生きる道が存在するのだということが、そもそも現代社会において認識されていないのかもしれない。

私はそうした生き方が確かに存在するのだということを、自己の全てを課して証明したいのと思う。私の全てを自分が善き生き方だと信じるそれに投げ入れるような覚悟が湧いてくる。

今の私はまだ、人が人らしく生きることの道の途上にある。道を歩く最中に、常にその道から私を遠ざけようとするような働きかけがあるのを知っている。それらを全て払いのけながら、一人の人間が真に人間となり、最後の最後まで人間であろうとするような生き方を何としてでも完遂させたいのだ、という強烈な感情が自分の内側を駆け巡っていることに気づいた。

内側に意識を向けていた状態から少しばかりハッとしたように、書斎の中で起こっている現象に意識が向かった。気づけば、ベートーヴェンのピアノソナタ第17番『テンペスト』の第1楽章が流れ始めていた。

小さな熱気の粒子が私の内側に流れていく。この曲に込められた、決して消えることのない小さな灯火のようなベートーヴェンの熱気が、私の内側の世界のある一点へと収束していくかのようなのである。その一点は、紛れもなく私の中心点なのだが、そこへ向かう熱気の線は無数だ。無数の線が中心点に向かう様子を観察していると、この世界の全てが内なる世界の中心点に向かっていくことに気づく。

そして驚くべきことに、中心点に向かって伸びていたはずの無数の線を捉える視点が変化したのだ。ベクトル方向が私の内側の中心点に向かって進んでいたはずの無数の線が、実は逆に、中心点から外側に向かって進むことに気づいたのだ。つまり、外側の世界の多は内側の一に流れ、内側の一は外側の世界の多に流れていくのだ。「ああ、これが多から一へ、一から多へという根幹原理なのだ」ということを身を持って体験したような感覚に陥った。

『テンペスト』が第3楽章に入った。まさにこれだと思った。第3楽章の出だしが持つあの小刻みに熱気を放つ流れ。熱気の渦が私の内側の中心点に無数の線を形成しながら向かっていく。そして、その中心点から熱気が再び折り返され、再び無数の線を辿りながら外側の世界へと流れ出す。多から一へ、中心点を折り返し地点として、再び一から多へ……。

この循環過程は、人間の生きることの中に根幹的に潜んでいるのだ。人間性とは何たるかを追求し、最後の最後まで人間であろうとする試みを完遂させるためには、この循環過程が不可欠なのだと思ふ。2017/5/6

1035. 五年前の夢から:宇宙の誕生と自己の誕生

朝食のリンゴをかじった瞬間、五年前に見た感動的な夢を突如として思い出した。今から随分と前に見たはずのその夢が、突然落雷に打たれるかのように予期せぬ形で思い出された。

当時の私はサンフランシスコに住んでいた。あの日は確か、普段通りに大学院に行き、普段通りに生活をしていて何の変哲も無い一日だったと記憶している。その日の夜、私はおそらく初めて、宇宙空間に飛び出す夢を見た。宇宙空間の中を遊泳するかのよう、私は身一つで宇宙空間の中に漂っていた。

無限に広がる空間の中はとても暗く、遠方に輝く星や惑星が少しばかり見えている程度であった。そのような宇宙空間を遊泳している最中に、遠方の別々の方角から四羽のハトが、宇宙空間のある一点に向かってゆっくりと飛んで来るのが見えた。

東西南北の方角から、一羽一羽のハトが輝く青白い線を宇宙空間に描きながら、その一点に向かって動いているのが確認できた。宇宙空間に存在しているはずのないハトに少々戸惑いながらも、私は四羽のハトの動きをじっと観察していた。宇宙空間の東西南北に引かれた青白い線の輝きは圧巻であった。青白い線が、ゆっくりゆっくりと一つの点に向かってやってくる。

そして、一つの点に四羽のハトが集まった瞬間に、それが起きた。四羽のハトが一つの点で結合した瞬間、途轍もない爆発が起きたのだ。それは白と黄色が混じったような輝きを放つ爆発だった。それを目撃した瞬間、宇宙の始まりは四羽のハトの結合から生まれた爆発なのかもしれないと思った。

これは荒唐無稽な考え方かもしれないが、四つの何かの結合した瞬間に宇宙が誕生したのではないか、という思いを私に抱かせるには十分な光景であった。そして、私はその光景に思わず息を飲み、涙が溢れてきた。一筋の涙が頬を伝った時、私は光り輝く爆発の中に一挙に吸い込まれていった。そして、輝きそれ自体と私は同一化した。

そこで私は夢から覚めた。夢から覚めると、夢の中の私のみならず、夢を見ていた私も涙を流していたことに気づいた。その夢が象徴していたのは、宇宙の誕生と私の誕生は全く同一のものだということだった。宇宙が誕生したまさにその瞬間に、この私が誕生していたのだ、という疑いようのない気づきに打たれたのである。

五年前にこの夢を見たとき、私は夢を研究している友人とこの夢についてあれこれと話し合っていたことを思い出す。今から振り返ってみると、この夢が私にもたらした意味は極めて重大であった。

今この瞬間の私に対して、この夢が未だに強い作用を引き起こしているのを見ると、この夢のシンボルが持つ力はとても巨大であり、深淵なものだと思う。宇宙の誕生と私自身の誕生が同一であるという気づきは、今の私にとって何にも増して重要なものだった。2017/5/6

1036. 新緑の季節

目を見開かされるほどに、新緑の木々がそよ風に揺れながら輝いている。今日の午前中は曇り空が続いており、今日も先週のような晴れ間のほとんどない天気になるのかと思っていた。ところが、正午から一気に晴れ間が広がり始めた。厳密に日数を数えていたわけではないのだが、このような晴れ間を見たのは久しぶりのように感じた。

春の太陽光によって視界が開かれ、書斎の窓から見える景色もこれまでと全く違うものに見えた。その一つが、青々と茂り始めた新緑の木々であった。それが春の午後のそよ風に優しく揺られる姿は、私の心を落ち着かせるには十分であった。太陽光が木々の葉に当たる様子を見ていると、その暖かさがこちらにまで伝わってくるかのようにであった。

一階の部屋には専用のバルコニーがあり、その住人が友人を招いて飲み食いをしながら談笑しているのが聞こえてくる。今日はとても陽気な土曜日だ。私は窓の外の景色を眺めながら、少しばかり午前中に考えていたことの続きを考えていた。一つの季節が終わりを告げ、新たな季節に入っていく実感を得てみると、それは人生にも何か通じるものがあるように思った。

人生の一つのフェーズは明確な終わりを告げることなく、それは次のフェーズにすでに流れ込んでいる。流れて組み込まれていくという循環が、私たちの人生の中にはあるようだ。そのような気づきをふともたらしたのは、午前中に読んでいたジャン・ピアジェの“Structuralism (1968)”という書籍だった。本書を読みながら、ピアジェはやはり発達心理学者などではなく、全くもって哲学者であったことに気づかされる。

ピアジェが非常に優れた認識論者であったことが、本書から伺い知ることができる。特に、私の中で最も重要なテーマの一つである、知識の構造と体系化について、本書は多くのことを私に気づかせてくれる。

全七章のうち、今日は書き込みをしながらゆっくりと三章まで読み進めた。本書の中でピアジェは、クロード・レヴィ=ストロース、ミシェル・フーコー、タルコット・パーソンズ、ノーム・チョムスキーらの構造主義思想を批判的に検証しながら、新たな構造主義を切り開くことを試みている。

言語と思考の関係性、知識体系の構造的発達の探究に生涯を捧げたピアジェの思いの一端が、本書を通じて私の内側に響いてくるかのようなのである。それは、目の前の新緑の木々が、そよ風に揺られて奏でる響きのようなであった。2017/5/6

1037. 作曲活動の進展

作曲という表現手段を得てから、私の生活は様変わりしたように思う。世界を認識する方法、そして世界との関与の仕方に関して、全く別の感覚器官が新たに加わったかのような感覚がするのだ。

昼食後、近くのスーパーに買い物に出かけた時、そこは音楽の種で満ち溢れていた。いや、音楽そのものが世界に満ち満ちていることに気づいたのだ。

これまでの私は、自然言語と数学言語のみを通じて世界を認識し、世界に関与しようとしていた。しかし、作曲という表現活動に少しずつ取り組むことによって、世界がこれほどまでに音楽言語で彩られたものだったのだということに初めて気づいた。

午後、先日イギリスから届いたテキストを紐解く私の心は踊っていた。それは、新緑の木々が春風に揺られるよりも小刻みなリズムを刻んでいた。“Music Composition for Teens: A graded first course (2013)”という70ページほどの薄いテキストのページをめくる私の気持ちは、作曲をこれから純粋に楽しもうとする子供のような気持ちであった。15章から構成される本書のうち、今日は4章の途中まで読み進めた。

本書を読み進めながら、同時にMuseScoreという作曲専用ソフトを活用して、実際に五線譜に音符を置いて音を作っていた。このテキストは非常に親切に音楽用語について解説しており、音楽知識が全くない私でも難なく読み進めていくことができる。新しい言語を学んでいるような感覚で音楽言語を学び、その知識をもとに音を生み出していく作業は、自然言語を学ぶのとはまた異なった喜びをもたらす。少しばかり今日の作曲実践から得られた気づきを書き留めておきたい。

最初のうちは、テキストに書かれている手順を忠実に守って音の流れを生み出していった。しかし途中から、テキストに書かれている内容から派生して、「テキストにこのように書かれているが、仮にこのように試してみたらどのような音が奏でられるのだろうか？」というように、様々な実験をしながら曲を作っていた。

もちろん、テキストに書かれていることは作曲の基礎であり、非常に有益である。だが、テキストからはみ出す形でどんどんと自分なりに実験をしていくことの方が、もしかすると様々な発見があったかもしれない。それほどに、自分で試行錯誤してみるということは、学びの幹を太くするのだ。

現在使っている作曲ソフトへの音符の打ち込みが慣れていないため、キーボード上のどのキーを押せばどのような音が出るのかを確かめながら、試行錯誤の段階では規則性なく直感的に音を並べていた。すると面白いことに、乱雑性の度合いが高すぎると意味のわからない音の流れが生まれるのだが、乱雑性の度合いが程よい場合、意味が通じる音の流れが生まれた。ここで言う意味が通じる音の流れというのは、私が感覚的に心地よいと感じる音の総体である。

直感的に音符を並べてみただけなのだが、それにもかかわらず、心地よいと感じさせる音の一端が生み出されたのは不思議なことだった。ある意味、それは思わず口ずさみたくなるようなフレーズのような心地よさを持っていた。

そこで、このフレーズを繰り返し並べてみると、そこからさらに思わず口ずさみたくなるようなメロディーが生まれた。これもまた私にとっては驚きだった。今のところ、このようなフレーズやメロディーを意図的に生み出すことができないのだが、それを生み出す法則性の尻尾が見えたような気がした。

先日初めて曲を作った時、それは非常に陰鬱な響きを持つピアノ曲であった。それとは打って変わり、今日作った曲は躍動感に満ちており、自分でも思わず口ずさみ、潑刺とした力が湧き上がってくるかのような曲であった。作曲の方法を少しずつ学び、楽しみながら曲を作るということを今後も続けていきたい。2017/5/6

1038. 五線譜上の絵画

昨日は午後から夜にかけて作曲を行っていた。今のところ他の仕事との兼ね合いから、毎日曲を作ることはできない。作曲に充てられる時間は、主に土日のどちらかの一日の中の数時間ほどである。今はこのように短い時間しか作曲の学習と実践を進めることができないが、とにかく継続させていくことが大事である。

内側の思念や感覚を音に表現することに対して、自然言語を用いて行うそれと比較すると、別種の喜びを見出すことができるため、継続に関しては何ら心配することはないだろう。私が望んでいるのは、論文や日記の執筆と同様に、毎日作曲を行うことである。

そのためには、自分の内側の思念や感覚が自由自在に音に表現できるまで、基礎的な事柄を着実に自分の骨身にしていく必要があるだろう。そうした基礎鍛錬を経て、内側の音楽を自由自在に外側に形にできるようになってくれば、一日のうちの少しの時間を確保して毎日曲を作ることができるに違いない。そうした日が一日も早く訪れることを望む。

昨日の作曲実践を振り返っていると、新しい気づきがまた得られた。五線譜に音符を並べながら思ったのは、それは音楽を生み出すのみならず、絵画作品を生み出すことに等しいということだった。つまり、五線譜を一つのキャンバスと見立てると、そこに配置される様々な種類と数の音楽記号と演奏記号が一枚の絵画作品を形作っているということである。昨日自分が五線譜の上に描いた絵画は、お世辞にも美しいとは言えなかった。

曲から溢れ出る音楽美と五線譜から立ち現れる絵画美は、何らかの関係があるような気がする。聴覚的にも美しく、視覚的にも美しい音楽を創出することに向けて探究を始めたい。そのための第一歩は、過去の偉大な作曲家が残した楽譜を分析することだろう。それを行うために、私は数日前にベートーヴェンのピアノソナタ全曲の楽譜が一冊にまとまった資料を購入した。

ベートーヴェンの楽譜が届いたら、地道な作業だが、彼がどのような法則性で曲を生み出していったのかを掴むために、一つ一つの音符を自分の手で五線譜上に置き直していきたいと思う。これはまさに、私が米国に留学して以降行っていた、優れた学術論文をひたすら手書きで書き写すという実践を毎日行い続けていたことと似ている。

それによって私が学術論文の創出方法を少しずつ学び取っていったように、作曲方法に関しても同じことをしたい。全感覚を持って学ぶことを通じて、初めて対象から身体知を汲み取ることができ、それが本当の身体知になる。

五線譜上に絵画を描くのと同じ美意識を養っていきたい。五線譜上に絵画を描き、音を描くという意識を絶えず持ち続けることによって、自分の手で少しずつ美を生み出せるのではないかと信じている。2017/5/7

【追記】

上記の日記を執筆してからおよそ一年が経った。作曲に関して進歩が見られ、とても嬉しく思う。上記の日記が執筆された時は、まだ土日のうちどちらか一日しか作曲実践ができていなかったことがわかる。それから一年が経ち、作曲実践に工夫を重ね、日々実践を積むことによって、今では毎日作曲することが完全な習慣となった。もちろん、自由自在に内的感覚を曲にする境地には全く至っていないが、昨年からの確かな進歩を感じる。この進歩をこれからも着実に続けていきたい。また来年の自分の作曲実践の姿がどのようになっているか楽しみである。ズヴォレ中央駅:2018/5/30(水) 12:08

1039. 無気味な夢

天気予報によると、今日は晴れ間を覗かせる日曜日になるそうだ。しかし、起床直後に空を眺めると、薄い雲が空を覆っている。書斎の窓から見える新緑の木々は、昨日のように春のそよ風に揺られることもなく、静止している。しかし、それは静止しているのではなく、実際には絶えず脈動しているのだ。対象が静止しているように思えても、実はそうした静止状態を生み出すために、対象の内部は活発な運動を続けているのだ。これはダイナミックシステム理論を通じて学んだことの一つである。

目の前に見える木々は、内側で絶えず動的な運動を続けながら静止状態を生み出している。新緑の木々を眺めていると、この夏にノルウェーを訪れる計画について少しばかり考えていた。

ノルウェーの豊かな自然、特にその地にある深い森とフィヨルドは、私を強くこの国に引き寄せる。何の脈絡もなく、ノルウェーへの旅行に際して、ベートーヴェンのピアノソナタの解釈書を持って行くという思いに至った。実際のところ、それらの書籍はまだ購入していない。ほぼ購入を決断した、ベートーヴェンのピアノソナタに関する十冊ほどの書籍のタイトルが、購入リストに並んでいる。再来週あたりにでもそれらを注文し、この夏、ノルウェーに数冊ほど持っていきたいと思う。

昨日は午後から夜にかけて作曲を行っていたためか、不思議な夢を見た。いつも作曲実践を行った日の夜は、印象的な夢を見る。昨日の夢に現れたシンボルは、これまで以上に解釈が難しいものであった。それらが何を象徴するのかを詮索することなしに、夢の内容を時系列に沿って書き留めておきたい。

最初に見た夢は、私が日本で働いていた時にお世話になっていた二人の先輩と一人の上司が登場人物として現れた。その上司を教師とし、先輩二人と私は、日本語で書かれた国語のテキストを開き、万葉集か何かに対する評論を読むことに取り組んでいた。

二人の先輩が順番に評論を音読し、私の順番になった。指定されたページは44ページであり、その箇所は「道」という表題だった。しかし、指定された箇所を開いても、私のテキストには一切その箇所が見当たらなかった。その上司と二人の先輩は、最初は私のテキストに該当箇所がないことを心配していたが、私が持っているテキストが異なるテキストであることに気づき、若干呆れ顔になっていた。

正しいテキストを購入することを勧められ、最初の夢の一幕が閉じた。そこから場面が変わり、私は大海原の上に浮かぶ一艘の舟の上にあった。自分が舟の上にいることに気づいた時、周りには、船長と私の父、そして見知らぬ女性が一人いた。

船長から「かかった！」という声があり、一人の女性が太い糸を手繰り寄せながら何かを釣り上げようとしていた。その女性の手元の先を見ると、大海原の表層に10m近い巨大なサメが現れた。その女性は懸命に巨大なサメを釣り上げようとしていた。

結局、サメの大きさがあまりに大きかったため、舟の上に釣り上げることをせず、舟を動かしながら海中を引きずる形で陸地に向かうことにした。そこで再び場面が少し変わり、その巨大なサメは実はサメではなく、人間であることがわかった。

それは、織田信長時代に虐げられた人種であるということをお父から教えられた。陸地に上がり、その人種についてインターネットで調べようとしても全く情報が検索できなかった。どうやら情報統制によって、その人種に関するあらゆる情報がこの世界から抹消されているようであった。魚類から人間へ進化し、再び魚類に戻った人種がいることに私は相当な衝撃を受けていた。

生物の進化は不可逆的であるはずなのに、見たところ退化と思えるようなその現象を信じるのが難しかった。夢の中で私は、情報統制と情報の抹消、そして人間の進化と退化について、不気味なものを感じていた。2017/5/7

1040. 早春の日曜日より

昨日に引き続き、今日も昼前から素晴らしい天気になった。今日の起床時は、薄白い雲が空を覆っていた。午前中、まずはジャン・ピアジェの“Structuralism (1968)”を読んだ。「発達段階とパフォーマンスは不可分である」というピアジェの指摘は、注意深くそれが意味することを掴まなければ誤解をしてしまうだろう。

ここでピアジェが述べている「発達段階」というのは、ある個別具体的な活動を通して育まれた個別具体的な能力のことを指す。それは決して、日本で普及しつつある「意識の発達段階」と単純に括られるようなものではない。

ピアジェは常に、具体的な活動を通して個別具体的な能力を想定していた。ピアジェが元来生物学者であったがゆえに、生物は活動を通して環境に適応し、環境へ適応するための具体的な活動を通してのみ、個別具体的な能力が育まれることを知っていた。

以前の日記で指摘したように、現在日本で普及しつつある「意識の発達理論」と呼ばれるものは、対象領域がひどく曖昧であり、それにもかかわらず、意識の発達を安易に個別具体的な能力のパフォーマンスと結びつけてしまうような傾向がある。これには注意が必要である。

結局のところ、個別具体的な能力のパフォーマンスレベルを知りたいのであれば、その能力の発達プロセスを明らかにする理論と測定手法を活用することが不可欠である。十把一からげに多様な能力領域を「意識の発達」として扱おうとすることは、ひどく乱暴な見立てである。ある意味で、それは人間の多様な能力を意識の発達という曖昧なものに括ろうとする、一種の還元主義である。

私たちは語ろうとする能力と活用しようとする発達段階モデルとの妥当性を常に検証する姿勢を持たなければならない。さもなければ、私たちが発揮する諸々の能力が「意識の発達」という漠然としたものに還元される傾向は拍車をかける一方だろう。そのようなことを考えながらピアジェの書籍を読んでいた。

結局、午前中は本書を一章ほどしか読み進めることができなかった。哲学書を読むにふさわしい身体と精神がその瞬間に存在しておらず、身体と精神に少しばかり鈍重な感覚があった。そのため、ピアジェの書籍を読むことをそこで中断し、非線形ダイナミクスに関する応用数学の専門書に移ることもなく、さらには論文を執筆することもなく、森有正先生の日記を読むことにした。

書斎の椅子ではなく、ソファの一角に腰掛け、一時間半ほど先生の日記に目を通していった。早春の太陽光が部屋に差し込むのと同じぐらい、私はこの日記から得られる光を必要としていたような感覚に陥った。

ピアジェの書籍を中断したことは正解であり、応用数学の専門書を読み始めなかったのも正解であった。それらは落ち着いた精神状態の中で丹念に読み進めなければならない。哲学書を読み、著者の思想に本当に触れるというのは極めて難しいことだとつくづく思う。応用数学の専門書もそこで記述される数学理論と数式を真に理解するためには、腰を据えてそれらと向き合わなければならない。

ただし、それらの難しさは、一人の人間の思想を真に掴むことよりも難解なものではない。そのようなことを思うと、哲学書との向き合い方を再び検討する必要があるだろう。

オーストリアからオランダに戻ってきて新たに始めた習慣をさらに真剣に継続させたい。一日の最初の仕事は、今の自分が読むべき哲学書を少しずつ読むことであり、これを完全な規律としたい。

まとまった量を多く読むのではなく、一時間でも一章でもいいのだ。とにかく少しずつ何かを築き上げていくような姿勢で毎朝の仕事に向かいたい。

部屋の中に、神々しいバッハの曲が鳴り響く。今の私には、マウリツィオ・ポリーニが演奏するバッハの演奏を「神々しい」としか表現することができない。だが、バッハが音楽体系をそうした境地へ少しずつ築き上げていったように、私にできることも日々の小さな建築行為だ。2017/5/7